(6) 漂流した人々

無人島に流れ着いた長平　海に面した土佐は、漁のために船を使うだけでなく、米や材木など特産物を運ぶのにもよく船を使っていました。この船は千石船[1]といわれ、帆で走る船です。鎖国をしている幕府は、ひそかに外国に行くことや、西洋のものを持ちこむことを防がなければならないため、この千石船の使用をすすめていました。

しかし、千石船の使用が多くなると、しけにあって海岸から沖に流された船は沈没したり、漂流したりすることが多くなりました。また、黒潮に流されることもあり、海の事故はふえるばかりです。

岸本村に住む長平も事故にあったひとりです。船乗りの長平は、1785年24才の時、藩の米を赤岡から田野へ送りとどけて帰ってくる途中、暴風雨にあい10日以上漂流した後、鳥島（東京都の伊豆諸島）に漂着しました。鳥島は無人島で秋になるとあほうどりがたくさんやってきます。長平たちは、冬の間に鳥の干物を作り、1年中主に鳥の肉と雨水でうえをしのいでいました。1年半のうちに3人のなかまは次々になくなり、3年めに流れ着いた大阪（大阪府）の船乗りや、5年めに流れ着いた薩摩（鹿児島県）の船乗りたちと

野村長平の墓と像（香南市香我美町岸本）

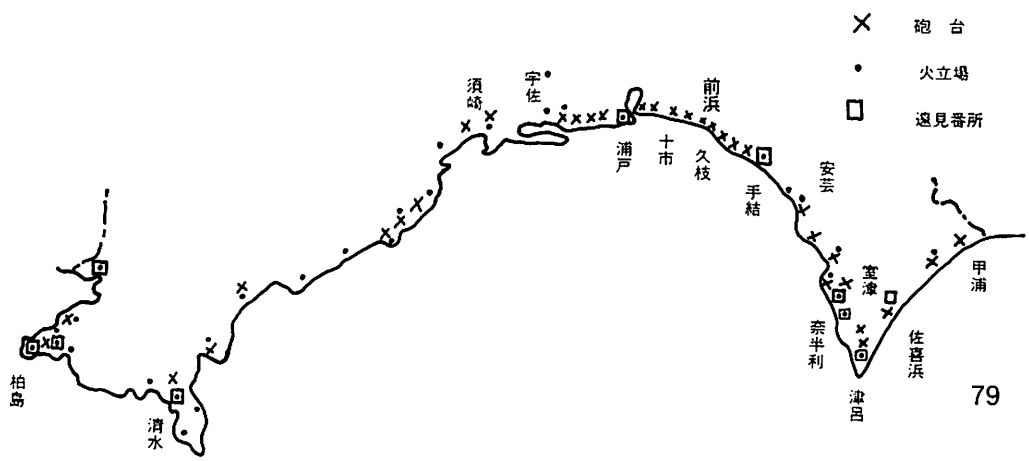
協力して小船をつくり、長平ら14人は青ヶ島、八丈島を経て、伊豆へ帰って来ました。八丈島では、漂流民は異国でキリスト教を信じているかもしれないため、幕府の役人からきびしい取り調べを受けました。その後、江戸でもう一度取り調べを受け、長平は13年ぶりに岸本へ帰ってきました。

外国船にそなえて　島原の乱以後、幕府は南蛮船がやってくることにとても神経をとがらせ、各地に遠見番所をつくらせ、そこから見張りをし、外国船を発見するとすぐ江戸へ知らせるように命じました。

土佐藩でも、幕府の命令により浦戸や手結などに遠見番所をつくり、あやしい船を見かけるとより早く知らせるために、火立場(2)もつくりました。しかし、海岸線が長い土佐では、異国船の出没が多くなると藩士だけでは手が足らず、異国船が来ると郷士(3)や鉄砲を持った漁師までかりだして警備にあたっていました。

幕府は、1853年のペリー来航でますます海岸の警備を強化しました。土佐藩でも、1854年から須崎、浦戸、前浜など土佐の沿岸各地に近代的な砲台をつくりはじめました。このなかで最大級のものが須崎の砲台です。しかし、大砲とはいってもホイッスル砲で、大きな音はするが砲丸は海までとどかなかったといわれています。さいわいにも土佐では外国船などに圧力を加えるぐらいで使用されませんでした。

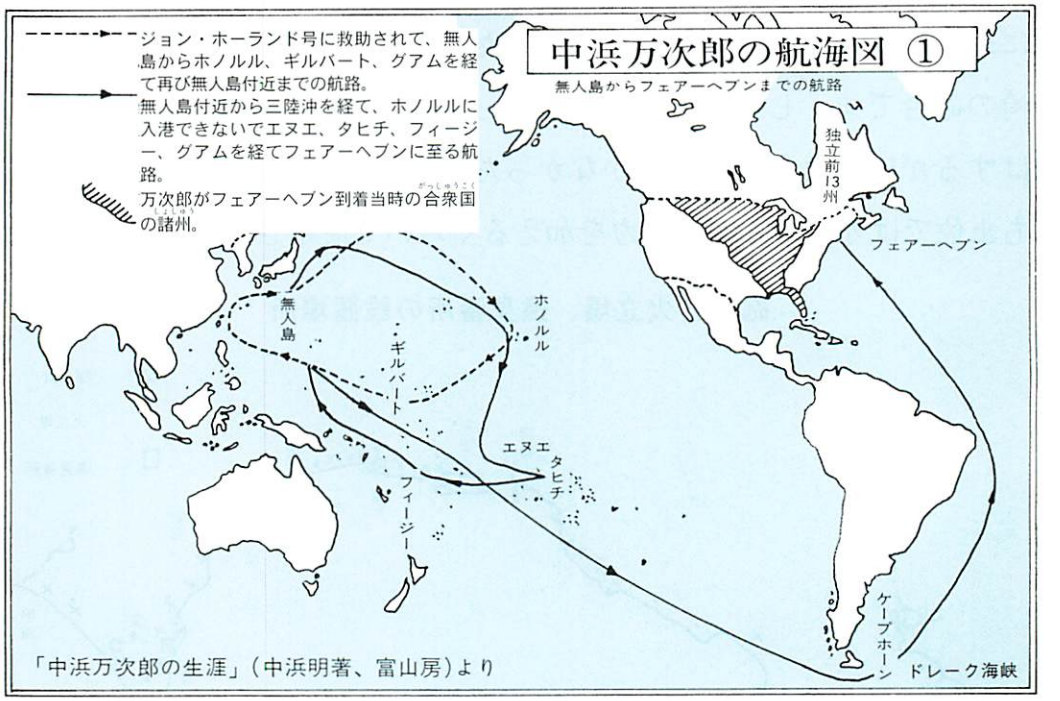
砲台、火立場、遠見番所の設置場所



前浜砲台跡（南国市前浜）

アメリカへ行った万次郎　幕末にヨーロッパやアメリカの新しい文化をとり入れるのに、大きなはたらきをしたのが中浜万次郎（ジョン・万次郎）です。

万次郎は中浜（土佐清水市）の漁師の家に生まれました。14才（1841年）の1月、4人の漁師といっしょに宇佐（土佐市）から



「中浜万次郎の生涯」（中浜明著、富山房）より

かつおつりに出かけました。漁に出て3日め、暴風雨にあい7日間漂流した後、無人島の鳥島に着きました。運よく万次郎たちは、その年の5月にアメリカの捕鯨船ジョン・ホーランド号に助けられました。そして、万次郎はなかまの4人とハワイで別れた後、船長の好意でアメリカ東海岸にあるフェアーヘブンの船長の家から学校に通い、一人前の船乗りになる勉強をしました。そのうえ捕鯨船にも乗り太平洋を巡って、航海術だけでなく見聞を広めました。また、帰国のためのお金をかせぐためカリフォルニアの金山に入って働きました。

万次郎帰国時のスケッチ

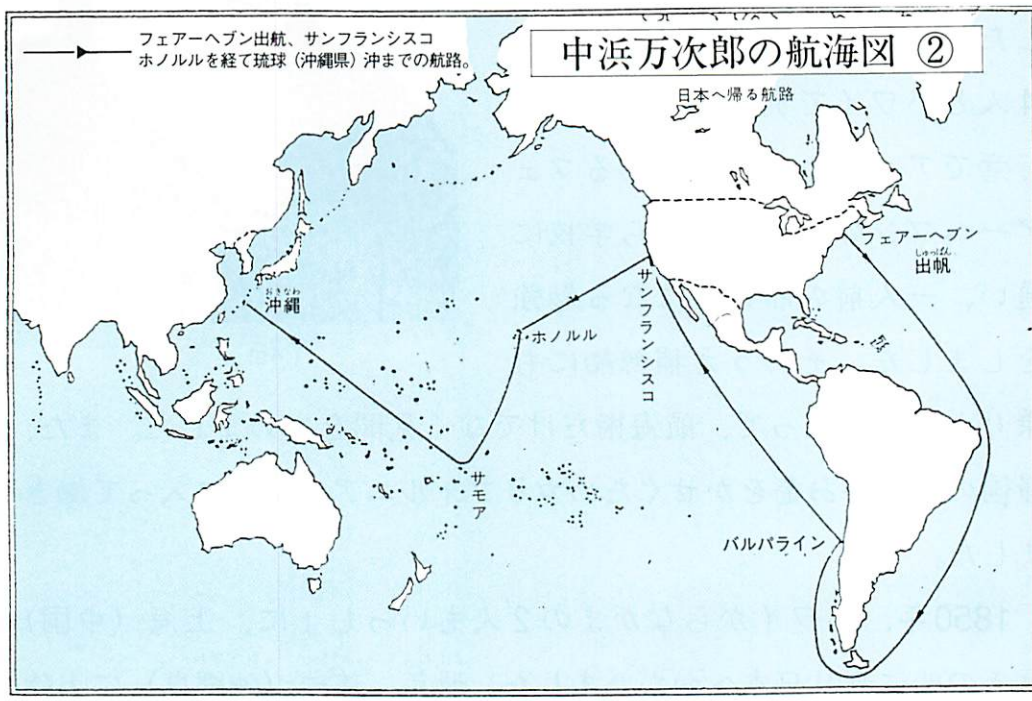
(河田小龍画)

1850年、ハワイからなかまの2人もいっしょに、上海（中国）行きの船に乗り日本へ向かいました。翌年、琉球（沖縄県）に上陸してから、薩摩（鹿児島県）、そして長崎でも長い取り調べを受けました。土佐藩に帰っても同じように取り調べを受け、1852年、11年ぶりに、やっと生まれた中浜村に帰り着きました。

翌年、ペリーがやって来た時、幕府はアメリカの様子をくわしく聞くために、さっそく万次郎をよび出しました。万次郎は幕府の役人になり、幕府の命令で西洋式帆船をつくりました。また、アメリカの航海術の本を日本語に訳したり、通訳や軍艦操練所の教授にもなりました。1860年、咸臨丸に乗ってアメリカへ行きました。帰国

後、薩摩藩の学校で英語や軍艦操練を教えたり、土佐藩の船を買うため上海（中国）へ行ったりと目まぐるしい活やくをしました。

明治になってから開成学校（今の東京大学）の教授になりました。1870（明治3）年ヨーロッパ出張中、ロンドンで足にできものができ、それがどうしても治らず日本へ帰ってきました。帰国後も体をこわし、その後あまり活やくせずに一生をおえました。



「中浜万次郎の生涯」（中浜明著、富山房）より

注(1) **千石船**　江戸時代にさかんに使われた運送船。瀬戸内海で発達した弁才船を改良した帆船で、経済的には積載能力にすぐれていた。しかし、舵がこわれやすく、中央部の甲板はただの揚げ板式のため、あら海では海水が船内に入りやすく、シケに弱い。

(2) **火立場**　異国船を発見したときより早く通報するため、昼はけむりをあげ、夜は火を立て、リレー式に次々と知らせ城下に伝えるためのもの。

(3) **郷士**　一般には、農村に住む武士または農民で、武士としてのあつかいをされていた者のことをいう。土佐藩の家臣は、大きく分けて上士と下士に分かれていた。上士は、山内一豊の土佐入国にともなって入ってきた武士で、城を中心とした周辺部に居住していた。一方、下士は、城の周辺より西の上町に住んでおり、下士の大部分が、長宗我部氏の家臣の子孫たちであった。上士と下士との身分の差は大きく、上士と下士とは、常に対立をしていた。1626年土佐藩は、下士をふくむ旧長宗我部派の不満をやわらげるために、下士や一領具足（長宗我部氏を支えて働いた農民兵）の一部を郷士の身分として、取り立てた。したがって、土佐藩における郷士は、もと長宗我部の家臣であったもので、新田をひらいて土地をもち、武士の身分をあたえられたものが多かった。